



「ヒヤリ・ハット」はなくすべきか？

おお たに ひで お
大 谷 英 雄†

工場などではよくヒヤリ・ハット事例の収集が行われている。これはヒヤリ・ハットをなくすために行われている活動であるが、これらの事例はどのように活用されているのであろうか。“ヒヤリ・ハット”するような状況は危険であるから、“ヒヤリ・ハット”しないように状況を改善する。それは本当に正しい対応の仕方であろうか。

一般には、ハインリッヒの法則で、大事故、小事故、ヒヤリ・ハットの比率が1:29:300だから、ヒヤリ・ハットの件数を減らせば、大事故の件数も減るはずだと信じられているようである。一方で、世間一般で言われていることに、小学生くらいのうちに小刀などで鉛筆を削るような危険な（ヒヤリ・ハットする）経験をさせなくなったために、いざ刃物を扱うようになったときに従来よりも大きな怪我をするようになった、あるいは刃物の恐さを感じられなくなっているというものがある。このようなことは世間でよく耳にすることではあるが、実体としてどうであるか正確なところを調べるのは困難であろう。しかしながら、これが本当だとすればヒヤリ・ハット活動と矛盾するのではないだろうか。つまり、ヒヤリ・ハットをなくすと事故件数は減るかもしれないが、大事故の件数は必ずしも減少しないのではないかということである。大事故に繋がりがかねないヒヤリ・ハットは330件中1件であるので、ヒヤリ・ハットを329件までなくしても大事故に繋がるヒヤリ・ハット1件が残っていれば、結局大事故の件数は減らないということである。ヒヤリ・ハットをなくして安全な職場を作ろうとする活動が、大事故に繋がりがかねない不安全な要素がたくさんある職場では有効であっても、ヒヤリ・ハット活動が進み、不安全要素がほとんどなくなった職場においては、危険に対する感性を鈍くさせ、大事故の予兆を感じ取れなくさせ、大事故に繋がりがかねないヒヤリ・ハットを見逃しているのではないかということである。2007年問題が現実化する時代を迎え、工場の立ち上げに携わっ

たような人たちが次々にリタイアし、入社した時点から安全な職場しか体験していないような人たちが大事故に立ち向かえるかという懸念である。

また別の例として、湯沸かし器や扇風機、消火器の例に見られるようにわれわれの身近で使用されている工業製品の寿命が非常に長くなり、メーカーが設定した耐用年数を越えてから起こったような事故がマスコミで報道されている。ここで問題となるのは、メーカーが設定した耐用年数と、一般消費者が感じる、いつまで使えるかという実感としての耐用年数との不一致である。一般消費者は、多少の不具合を感じたとしても、メインの機能が失われていなければ、まだ使えるだろうと判断するのではないだろうか。このところの家電製品の事故例を見ても非常に長期にわたり使われ続けている製品があることに驚かされる。長期にわたり使われていることには、経済的な要素、環境問題に対する配慮などいろいろな要素があると思うが、一つの要因として工業製品の信頼性が高くなり、すぐに壊れるような製品にお目にかかることがほとんどなくなったことがあるのではないだろうか。使っている製品が壊れたという経験をしなくなると、使用年数が長くなると製品は壊れる可能性が高くなるということを理解できなくなるのではないだろうか。設計者にそまでの配慮を望むのは無理であろうが、何も製品全体が細部まで同じ耐用年数である必要はないのだから、安全性に関係のない部品から徐々に耐用年数を迎え、消費者に買い替え時期を教えるような設計ができれば耐用年数に関係する事故は防げるのではないかと思う。

ヒヤリ・ハットにしる、製品の耐用年数の話にしる、経験していないことは理解するのは困難であり、最近のマスコミ報道などを目にするにつけ、事故に繋がらないヒヤリ・ハットする経験を体験するという工夫が貴重なのではないかと考えることの多い近頃である。

† 横浜国立大学 大学院環境情報研究院：〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-7